

鈴木正三における死の習練について

新 保 哲

はじめに

本論文では、鈴木正三（一五七九～一六五五）の名著『驢鞍橋（上・中・下）』を取り扱い、そこで終始一貫して語られる「生死」観の問題、つまり受け止め方、把握の内容に立ち入って理解を明らかにすることが考察の狙いである。正確にいえば、この三巻は必ずしも彼の著書ではない。江戸期における正三の晩年の説法と問答を、弟子の恵中が師の示寂後にまとめ編集したものであることを予め一言お断りして述べて置きたい。

正三は早くから生死の問題に悩んだ。それは、幼少時の四歳の頃で、近所に居た従兄弟の死が原因している。以来、身辺に従兄弟の死を契機として、正三が成長した後々にも意識の潜在下に深く巣をくい、引き摺っていて、時折り死の観念が頭をもたげて起きてくるのであった。正三自ら、自分の事に触れて「（上・37）・・・我元より死を忘れぬ性なり。どこ

に有っても油断せられまじ。人に勝れて只死ぬがいやな性なり、是によつて果眼には用いたるなり。」（『驢鞍橋』『禪家語録集』所収、一九七四）と語っている。しかし、そこには次の法要の際に、正三が「（上・161）・・・死ぬ事を忘れずして、念仏申しめされよ」と図らずも言った言葉が何よりも雄弁に、死から離れる方法として念仏を只管に唱える事の大切さを教えている。正三が死の恐怖から目を逸らさず、真正面から取り組み、至りついた選択は、果たし合いの時の様な心を堅固に保持した、死をもおそれない、無我無心に徹し、禪定三昧境に突入するが如き眼を見開いた勇猛心の念仏になることであつた。そこに正三は死の超克を見付けたのであつた。

つまり、正三がたびたび口にする〈死に習う〉〈死に習はるべし〉とは、仏教知識によつて納得できる問題ではなかつた。正三の死生観の神髄は、同時に成仏観への道でもあり、ただ勇猛の心によつて鍛え上げていく、生死を離れる機、気合いの念仏にこそあり、それは法然などの念仏往生観のよう

に悟らぬ悟りが肝心だと言う処にその特色が窺われる。要するに、正三のいう仏法とは教典・語録での理解解釈とは全く別で、ただ歯を喰いしばって、死ぬこと一つを極める、そうした仏法世法共に忘れ果て、はらりと手を打ちたたたくが如くに成る成仏を勧めており、娑婆の念を去り、「習う外ない」坐禅の機力を用いた〈禅定の機〉を覚え、鍛錬して体で習う念仏にあった。

そもそも「生死事大、無常迅速」とは禅家の常套語であるばかりか、生を明らかにするは広く仏家における一大事の因縁である。そうした観点から、正三自身は死の覚悟を如何に受け留めたのか。つまり生死を離れる最大最上の方法とは何か。死なぬ身とは何か。既に先に述べたが、正三自ら「我元より死を忘れぬ性」「只死ぬのがいやな性なり」と語るところの「死の一字を胸の中の主となす」ことの真意とは何か。死に習うとは何か。端的に言って、正三は、苦を離れ後世を願うことは死して後のことにあらずと説く。そうした正三の死生観・成仏観・安心観の根本思想を、つまり「死ぬこと一つを窺むる」その究極点に関し、たとえば〈気合い〉をもって〈死ぬ事忘れずして、念仏（南無阿弥陀仏）申す〉ことの意味を考えてみたい。

一 死に習う

まずはじめに、『驢鞍橋』の本文の中から「死に習う」という箇所を焦点を絞り、問題点を拾い上げ、その関連する文章の幾箇所を引挙しつつ論考を進めたい。

〔上・10〕一日去る遁世者来つて修業の用心を問ふ。指示して曰く、万事を打置て、唯、死に習はるべし。常に死に習つて死の隙を明け、誠に死する時驚かぬようにすべし。〕

「死に習はるべし」には、死ぬことに熟達するという意味と、絶望的な勢いで鍛錬するという二重の意味をもつ。これは正三独特のことばだといえる。

そこで『大辞林』には、「習う」という言葉について、どいう説明が付されているかを見たい。そこには、次の様な記述がされている。①知識や技術を他人から教わる。②繰り返し練習・学習する。「習う」と「教わる」という二つの動詞は教師から積極的にじかに教えられる場合に用いる。これに対して「学ぶ」は人から教えられる場合だけでなく、学者が書物や人の行動などから間接的に学ぶ場合もある。また、道順など単純なことを教えられるときは「教わる」しか使えない。

そして更に「ならう」を〈習〉と〈倣〉の二つの表記に別け、「習う」は人から教わるの意。「倣う」は手本とし

鈴木正三における死の習練について（新保）

一二六

てまねるゝの意。「倣^{なら}う」とも書く。端的に言えば、倣^{なら}倣^{なら}倣^{なら}の関係であり、三者ともナラウという意味が基本にある。そうすると、習うには知識や技術を教え教えられることに依り伝達することが出来るということが判明する。そして更に主体的・積極的という付帯の意味がそなわって、同じことを幾度も繰り返し反復練習し知識や技術を身に付けるという行為へと転化される。また同時に、人から人へと直接的関係、コミュニケーションを取らなくとも、「習う」には間接的に自分のものとして身に付けることも可能であることも暗示される。但、実際問題として言えば、〈習うより慣れよ〉という諺があるように、物事は人から習うよりも実際に自ら試行錯誤し工夫を加え経験して慣れたほうがよく覚えられ、と云う解釈も一方にあることも忘れられない。

この含みのある奥が深い諺にぶつかったとき、ようやく一歩、正三の「習はるべし」の意味の読み取りができてくる。とはいえ、死とは明らかに体験して習うということは出来ない。体験した時は既に死者となつてしまっている訳で、その時は「習う」という言葉、行為はもとより意味をなさない。とするなら、「死に習はるべし」とは、何時、何処に起きるかも知れない予測できない、見えない、仮に言うならば、何者か、無底の深淵に向つて、死の瞬間迄ギリギリ一心不乱に絶えず死する時に驚かない様に心の準備・覚悟をする心

を、つまり諦観を養うことだと言い得よう。それが正三の言う成仏観そのものであり、安心して死ぬ心を指して言っているものであって、極端に言えば、打ち笑つて死ぬる心境になり切ることなのである。それが正三の説く悟りであり、それには、「無念無想を体とする」とまで提示するのである。そのために、次々と様々に心の底から湧いてくる煩惱を消滅する最良の方法として、機（気合い）をたて、眼をすえて、仁王・不動尊が悪魔降伏の形相の、勇猛心の気合いを受けて煩惱に勝つことだといふのである。いわばそれは、十二時中、浮心をもつて、悪行煩惱を滅すべく、自ら強く眼を著^つけて、拳^{こぶし}を握り、歯ぎしりして「禪定の機（気合い）を鍛え出す」そうした仏道修業なのである。

もう一度、ここで正三自身の口から出た説法を、現代語訳した言葉に置き直して直接に参入理解してみたい。

ある日さる遁世者が来て、修業の心掛けをたずねた。師は示して言われた。「万事を捨ておいてただ死に習われることだ。常に死に習つて死を自由にし、真実死するときにあわてぬようにすべきである。人を救い、理論を示すときには知恵も必要である。しかし、自分の成仏のためには何を知っているても害にしかならない。ただ馬鹿になり切つて念仏して死に習われるということが肝要である」。そこで遁世者は言つた。『盲杖』をいつも読んでいますが、これなどを見ることも

害になりますか。師は言われた。「見て覚えるならば全て害である。ただ念仏して死をたやすくせねばならない」。また遁世者は、「自分には悪心もなくなり、欲心などありません」と言う。師は言われた。「少しばかりの心の整理がつくと、

これでよいと思ひ込みがちなものである。どれほど無欲になり、善人になったとしても、この世間を楽しむ心、また自分の身を思う心のなくなるはずがない。しかしこのころを離れなければ、すべてが輪廻の原因となる。この心を滅するには、身心は敵だと思つてきつと睨み付け、念仏して攻め滅ぼす以外にない。別に理論のいることでもない。地獄に行くも、天国に行くも、他人の力で成仏するものでもなければ、他人に引かれて地獄へ落ちるものでもない。ただ、今いった心が、ひっぱって行くのである。……この心を離れて不生不滅であるのを成仏という。このように、自分で心の根を整理し尽くして成仏するのである。どうして傍らからあんだの心かたわをほろぼしてやることができようか。てごわく目を見張つて、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と命の限りに、ひた押しに押し、心の根を切り尽くすことだ。一般に、はなはだしい悪心や、叶いそうもない望みは、やむものだ。しかし、さりげなくあるものがある。心の根を切り尽くすことはむずかしい。であるから、この五尺の体を仇敵とし、念仏して念じ殺しなさい。これが心の根を切る修業である」。遁世者は言った。「そ

鈴木正三における死の習練について（新保）

れではこの身を捨てることと心得ておくのでしょいか。」師は叱つて言われた。「心得ておくのではない。仏道というのは身心を整理しつくすことなのだ」。

ところで、「習う」には、秘事などを習得体得すること、また習得した秘伝と言うことも意味としてある。しかし正三の「習う」ことの意味は全くそれとは関連しない。また更に、「学習する」という意味でもない。たとえば、「学びて思わざれば則ち罔くらし」（「論語・為政」…教えてもらうだけで自分で考えないのは、しっかり身についたことにはならない。学問には自主的な勉強、思索が必要である）とか、「学んだ時にこれを習う亦説よろこばしからずや」（「論語・学而」…教えを受けたり書物を読んだりして学んだことを、折りにふれて繰り返し学習することによつて身につけてゆくのはなんと楽しいことではないか）という学習的態度の在り方を説いたものでもない。更には、行動・様子などが他の人や物と同じになるようにする模倣、真似をするのと、ある形に似せるといった意味でも元よりない。勿論、ある心の状態に近づけるといった意味でもない。それは万事を放下無心に徹する所に急所があり、「死を習う」ということすら忘れ果て、生死の念からも離れる事を勧むる仏法修業なのだと言えよう。

（上・72）……悦びて死にめされば成仏なり。成仏と云ふは心安く死ぬ事なり。然る間、彼を殺す毎に、我が胴骨を推折ら

鈴木正三における死の習練について（新保）

一一八

れて、共に死習ひ死習ひして、打笑つて死なる、ほどにせらるべし。……我も万徳の事、誰にも習はざれども、自由に死なれざる事を苦にし、さまざま練鍛ふとして此の旨を知るなり、吾が法は臆病仏法となり。」（喜んで死なれたら成仏だ。成仏というのは安心して死ぬことだ。であるから、生きものを殺すたびに、自分の胴骨をへし折られて、ともに、死に習い死に習いして、打ち笑つて死ねるほどになさるがよい。……自分もあらゆる働きのこと、誰にも習わなかったが、自由に死ねないことが苦になって、いろいろと鍛練して、その意味を知った。自分の仏教は臆病仏教だ。）

〔上・77〕……仏法と云ふは、只今の我が心をよう用ひて、今用に立つる事なり。成程心を強ふ用いるを修業とす。心の強ふなるほど次第に使はるゝなり。大きに勤むれば、大きに徳有。少し勤むれば、少しの徳有り。……只悟を求めずとも修し行じて徳に至るべし、となり。（7）

〔上・107〕……一日去る待に示して曰く、始より忙わしき中にて坐禅を仕習ふたるが好きなり。殊に侍は貌波の中に用ゆる坐禅を仕習はで叶はず。鉄砲をばたばたと打ち立て、互いに鎗先を揃えて、わつわつと云ふて乱れ逢ふ中にて、急度用ひて、ここで使ふ事なり。なにと静なる処を好む坐禅か、加様の処にて使はれんや。そうじて侍はなにと好き仏法なりと云ふとも、ときの声の内にて用に立たぬ事ならば、捨てたがよきなり。……亦曰く、諸芸皆禅定の機を以て作す事なり。……然るに、仏道修業の者は、常住抜かさず此の機を用ゆるなり。此の故に、一切に負くる事なし。次第に鍛錬し、熟するに随つて、諳いや拍子の様な事にも合い、万事に相應して万徳円満なり。是の如く用ゆるを仏法と云ふなり。」

〔上・128〕……一日僧問ふて曰く、如何にしてか仁王の機を修し出すべきや。師答えて曰く、只死ぬ事を仕習うべきなり。我若き時、大勢の敵の中へ駆け入り駆けいりして死習ひけるが、是はやがて入られたり。またここ二三人鎗を構えて居る処に懸りて、胴腹を打抜かれて、死んで見るに死なれず、何としても入身に成、うの頸を取り、鎗を切折折して負けられず、この如くさまざまに死にならふとしてこの機を知るなり。」

ここで正三は、自らの白兵戦の生死を懸けた体験談をもちだして、死を覚悟で死を修め習われることが如何に「機」（気合い）の修身には肝心かを切切と説く。つまり修業の用心とは、仏道修業にあつても全く同様のことだが、事において狼狽せず、うろたえ者とならず、急度死を窮め目を据えて供を作す、そうした気構えを意味する。いいかえれば、気合いを入れてやれば、古則公案も、陀羅尼も、念仏も皆同じことだと正三は言う。更に言葉を補い、キリツと気合いを活発にしようと思ふならば、達磨の顔をにらみつけて、にらみ坐禅をするのがよいと説く。それは生死という悪魔を拒否するためであり、心が生じることが実は生死という悪魔が入り込む瞬間なのだという。

以上の様に、勇猛心の気合いを抜いた、機の沈んだ公案、陀羅尼、念仏など役に立たない、というのが正三の持論である。したがって正三の仏法、修業とは、すべからく「用に立つ」ものでなければならぬというのである。

翻って、そもそも何故、正三が、死について声を大に強調し、説法・講筵の合間合間に必要までに説法するかといえば、それには訳があった。すなわち、そのことに関し、次のように記されてある。

「(上・153)・・・我は廻るころより、機を抜かさず、四歳の時、同じく四歳になる従兄死す。我この時、さて死したが、どっちに行つたか、何と成つたぞと、ひとと疑起こりたりなり。」

この一節は、ある僧のなまけたる様子を見て、叱つて言つた時に正三の口を突いて出てきた言葉である。ともあれ、この一文に依つて正三がイトコの死により真剣に死を考える要因となつたことが知られる。そしてその時のイトコの死は正三の心の中に決定的影響を与えることになつた。すなわち、以後、正三が成長するに及んでその記憶は忘れ去り消えるどころか、逆に一層心の奥深く、意識の潜在下に深くひきずつており、それが聴き書き『驢鞍橋』の中で短い言葉ながら端的に記き止められている。

「(下・37)・・・我元より死を忘れぬ性なり。どこに有ても油断せられまじ。人に勝れ 只死ぬがいやな性なり。是によりて果眼には用いたるなり。」

「(上・161)・・・一日老婆二三人来たり、法要を問ふ。師、我何にても教ゆべき事知らずとなり。やや有りて、不図云はく、しぬぞよ、しぬぞよ。死ぬ事を忘れずして、念仏申しめされよ、となり。」

鈴木正三における死の習練について(新保)

正三は、死の自覚の動機は追究することは別としても、死の問題・課題に四つになつて取り組み、日常生活の中で如何に自分なりに納得のいく心の持ち方で超克を目指したのか、そのことが克明に拝察できるのである。弟子恵中は、正三の仏教における根本問題が「生死」であつたことを、次の一文が如実に証言している。挙げておこう。

「(下・129)・・・亦曰く、必ず死をはつしと守るべし。我常に是一つを云ふなり。正三何年生きても死より別に云ふことなし、となり。」

結び

そこで正三は、死の超克を何をもつて、どういう処にその急所・真髓を見いだし、成仏觀を心三寸に抱き死に向かつていったのかを考察したい。結論から先取りして言えば、それは念仏往生觀にあつた。すなわち、称名念仏による阿弥陀様に救ひ摂られる行為にあつた。正三は、死後・後世往生を期せず、只、今、ここにおける現世往生に首尾徹底し、そこにこそ死の超克を見出し満足する道を、自らの実験体験とおし選び取つていったのである。それが果たし眼坐禅、仁王坐禅、如来坐禅、土禅門(只土に成りて念仏を以つて死に習はるべし)と種々に言い表されるものだが、それは一言でいえば、機(気合い)を抜かない、強い気合いで、只一筋に念仏を唱

えるところにあった。

正三において何一つとして安楽な死に方はなかった。現代の医療現場でよく言われる「安楽死」という考えは正三にはなかった。それを等々することすら論外である。但し、「只念仏を以って不死を軽くすべし」「此の蠕袋を敵にし、念仏を以って申し滅すべし。是れ念根を切る修業なり」（『禪家語録集』一九七四）とする念仏觀を常にもっていた。たとえば、武州鳩谷の宝勝禅寺で近在の百姓数十人が集まっていた法廷では、「農業を以って業障を尽すべしと大願力を起こし、一^{ひと}鍬一鍬に、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と耕作せば、必ず仏果に至るべし。只天道に万事任せ奉り、正直を守って私の欲をかくべからず。然らば亦天道の恵みにて、今世後世ともよかるべし」と具体的に分かり易く対機説法をする。

また同じくその場で、次の様にも説示している。「いったい、ただ死ぬのは楽だと思われるのか。腫れて死ぬのも苦である。下痢して死ぬのも苦である。虫に刺し殺されるのも苦である。熱病で死ぬのも苦である。」結局、一つとして安楽な死に方はないと言うのである。

以上、正三の言う仏法とは語録での理解とは別で、ただ齒を食いしばって、死ぬこと一つを極める、そうした仏法世法共に忘れ果て、はらりつと手を打ちたたくが如くに成る成仏

を勧めており、娑婆の俗念雑念を去り放下着し、「習う外ない」坐禅の機力を用いた禅定を覚え、鍛錬して習う念仏にあった。すなわち、「只今の我心をよう用いて、今用に立る事」を説く仏法であり、悟ろうとする必要などなく心を強く用いることを修行する、つまり「只悟を求めずとも、修し行じて徳に至る」そういう念仏觀に支えられていた。翻って、逆に言う「只死なぬ身と成ること一つ」「只死ぬことがいやになつて修する」との意味は、また「しぬぞよ、しぬぞよ。死ぬ事を忘れずして、念仏申しめされよ」（『禪家語録集』一九七四）との表現となつて説かれる。

正三の念仏觀には明らかに日本浄土教念仏の本流とは視点を異にする、傍系ともいえる念仏觀が一部窺えるのも事実である。要するに、〈死に習う〉とは如何に一瞬一瞬を、死の恐怖、凡見、迷盲から自己脱出し、生死を離れた虚空一枚の境地を実践し現出するかにすべてが懸かっていたのである。それは死に徹する、死に成り切り極める地点にまで、死を修練していき、一切の心の煩惱を殺し尽くし、そこに至ることが生死觀・念仏觀・成仏觀であつたと考察される。

正三が常に念仏を唱えていたのは簡潔には「我が南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と云ふは、放下着、放下着と申すなり」という意味でもあり、放下着（一切を捨て去る謂）と唱えるよりも、念仏を常に唱えた方が耳に碍りが無いからであつた。

そして身を捨てるというのは煩惱である欲望の執着から離れ、心は無、無、無にすることであつた。執着ということさえ離れば、身体はあつても邪魔にはならないという考えからであつた。

ここで念仏に關し一言補足して置きたい。それは『驢鞍橋』の下巻を読むと、正三が唱えた念仏は、いわゆる六字の名号・南無阿弥陀仏の口称のみだけでなかつた。或る時には正三は、一僧に名号を「南無大強精進勇猛仏」と墨書し、更に「南無精進軍仏」「南無精進喜仏」の六字尊号の二仏名も左右に書き添え与えていることから、こうした正三が創り出した仏名号にも彼の唱えた念仏觀の思想的背景の片鱗が読み取られるのである。

〈キーワード〉 鈴木正三 死に習う、気合い、念仏觀

(文化女子大学教授・博士(文学))

鈴木正三における死の習練について(新保)

新刊紹介

佐藤 直実

『藏漢訳「阿闍仏国經」研究』

B五版・一六〇頁・定価三、七一五円
山喜房佛書林・二〇〇八年二月